

ジャックと豆の木

大分大学教育学部附属幼稚園（文責／園長 石川照代）



約40組の親子の参加
がありました。



わらべうたや
紙芝居を楽しみました。

地域子育て支援「すくすく広場」へようこそ！

小さなつぶつぶの正体は？

附属幼稚園にはこの季節、園庭のあちこちに“ダンゴムシハンター”が出没する。この日は、まだハンター経験が浅そうなAくんに出会った。ダンゴムシハンターたちは一様に、捕獲したダンゴムシたちを相手かまわず見せて回る習性があるのだが、例に漏れずAくんもダンゴムシをつまみ、私の手のひらに載せて見せてくれた。よく見ると裏返しのだんごむしの腹にびっしり！1ミリもないくらいの白い粒がくっついている。ん？さらに目を凝らしてみると、その粒はなんとなくごめいていたのだ！『ぎゃー』という私の心の叫び声はAくんには聞こえなかったと思うが。

「Aくん、これ何？何かつぶつぶがついてるよ。」「本で調べてみる？」の問いかけにもイマイチ反応は薄かった。とうとう我慢できずに「園長先生パソコンで調べてくるわ！」という、「え？パソコンがあるの？」パソコンがあることには強く反応し、Aくんは「うん」と頷いた。（正体はお母さんとそっくり同じ形状の赤ちゃんダンゴムシ。色だけ白）

「これからは、子どもの興味・関心に寄り添うために、情報ツールを保育に取り入れていくことも考えていくのではないだろうか。」これは、先日聞いた文科省の幼児教育課長の話である。保育の手法は、多様であっていいと思う。変えることを恐れず、試みる勇気は必要だろう。



もちろん、Aくんの「正体を突き止めたい」気持ちがあつてこそ成り立つ話。

Aくんは、本当に正体を突き止めたかったのかな？・・・これは、私の反省だ。

ここで不思議なのは、一人遊びでは育たないであろう「言葉」や「コミュニケーション」の力がどのように身につけていったのかということ。私には、5歳で幼稚園に上がるまで友だちと遊んだ記憶がありません。ただ、一つだけ心当たりがあります。

勤め人の父は、休みの日には決まって朝寝坊をしました。私たち姉弟は、父が起きてくる前に、父の話には筋書きがありませんでした。とりえず、「むかし、むかし・・・」と昔ばなしの決まり文句で始まるのですが、脱線したり、お話が変化したり、いきなりクイズが出てきたり、天井のシミを見上げながら、とりとめもなく話をするのです。「うつつ何？」「何でうつつたん？」よく父の話を遮り質問をしました。父は、何を訊いてもわかるように噛み砕いて答えてくれました。父の出すクイズは、少しひねったものが多く、私たちは何とか正解を出したくて必死に考えました。「ヒントちょうだい！」と言って粘ることもありました。そういった父との駆け引きが楽しくてしようがなくなかったのを覚えています。ネタが思いつかないときは、しりとりもしました。

日頃が忙しく関われない分だけ、父はそのつかの間、幼い我が子との言葉のキャッチボールを心から楽しんでいました。百科事典や文学全集はあっても絵本は殆どなく、当然読み聞かせしてもらったこともなかったと思うのですが、父との会話は私たちの言葉の力を育み、何より父との心の絆を育んでくれた貴重な時間であったと思います。

(つづく)



私を育ててくれたもの(その2)